

成形圖說

菜蔬部

二十一

農商務省
圖書部
第 共
冊

太政官文庫
和書門
八三四二
類號
三〇
架冊

內閣文庫
和書
八三四二
類號
三〇
架冊
一九六函
一九架

內閣文庫	
番號	和 8342
冊數	30 (21)
函號	196 98



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

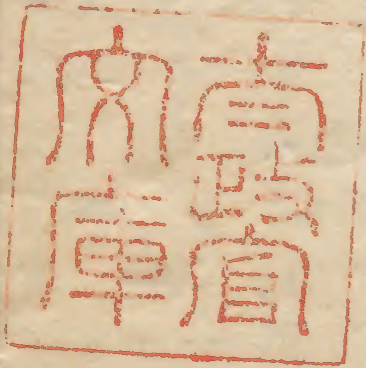


成形圖說卷之二十一

目錄

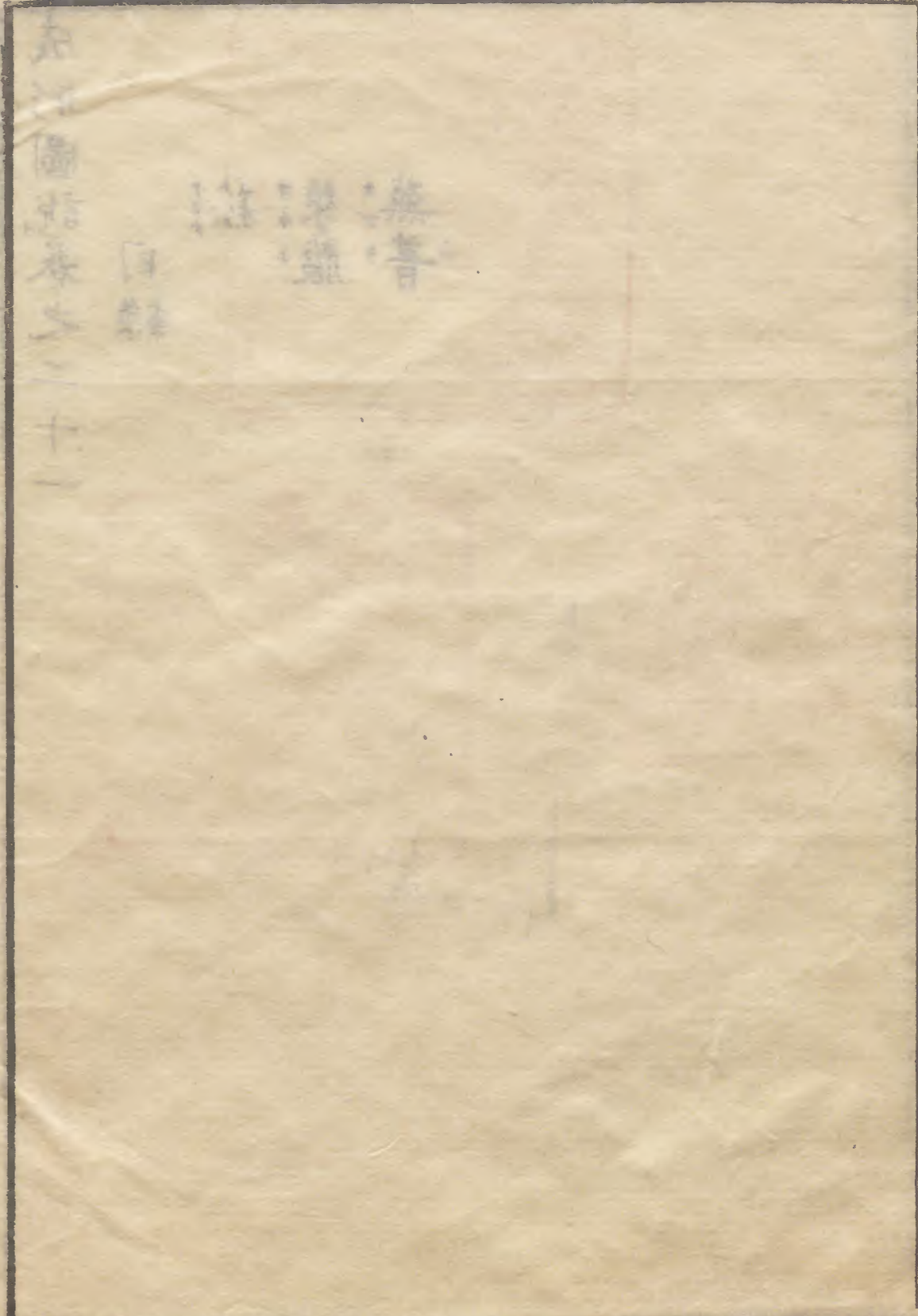


松マツ
 菜ナ腹ハラ
 蕪カ薯カ



明治十一年購求

成形圖說卷之二十一



成形圖說卷之二十一

菜部 園蔬類

菜此よりは奈と云凡嘗と通ふ詞みく飯と副く茹物と統
 と奈と云や俗云飯の菜ハ枕冊子と添とあるの訛みて
 云因魚と云奈といひ又美て真菜と称ハ菜より繕まる
 とつ今おほむを松城奈やハ菜中のいちどる地と
 いくあり猶いあり一獣みはオウ鹿と食とせしうばな
 へての肉とば志いと訓がバウし又蔬と書紀久佐比
 良と訓ハ叶葉の義あり葉と比良とつ葉手ハ葉手の
 式又葉盤と作又花の辨と大葉小葉とも和名鈔と出
 又俗又素食と草葉汁と今もつる和名鈔と出

成形圖說卷之二十一

菜蔬の字と連て久左比、良とし菌と云ふの訓は、菌亦菜
と云ふより轉るものど又菜とば直ニ葉と云ふハ祝詞
式子奥津藻葉邊津藻菜と云ふが如し今の俗ハ泛く野
菜と稱すことニ式子謂大野原子生物者甘菜辛菜と云
又山野能物波甘菜辛菜など裁らと云りて野生の物か
らでと輦轂の地小居ていへば菜蔬の類郊野子他云ふ
もの云ふじり人ハ野乃某菜野の某蔬と稱へし雅語
の後くハ訛りて已ヶ居宅子他云ふ園菜と云野菜と云
ふの通稱云なるよきともく又斯書ハ當用と主とせり
かゆ急園菜と云く首頁子ぶせり一通子々食物知新

云素問五穀為養五菜為充所以輔佐穀氣疏通壅滯也凡
菜蔬本所生于原野移之栽於田圃或摘采於山野或採於
河海以備于膳食也蓋菜蔬可食者名菘予謂近世益珍饈
奇饌異肴多矣由之今也王公大人尤賤藜藿而特貴殊珍
之芼羹難得之肴菘且枯富而委口腹於厨吏包丁多不辨
菜茹之主治不可而已醫家亦不明食性而無由教戒病
人云々凡菜蔬の類田圃子培る者ハ素と云り小く云へき
その性いへくと其性柔なりて毒ありて山野子おれ
はくは生るものハ其性良かりて毒味専なれば別し園
て菜子入るふて山野のものとしし食料小く培る

ものとしと凡山聖子生る者ハ氣を養し川澤子生
る者ハ水道越清し海濱子生る者ハ海と通次葢地産子
よりて肥瘦別粟の別あるまじ自然なる

七種新菜

正月七日新菜の羹と調ふと或もむじくは野生地種
と播り今又園菜と雑用ひきて其中て来る所史子割を
里葢本年の新蔬菜羹と 二所大神宮へ奉り御饌殿に
供ふと延暦二十三年撰む所の大神宮儀式帳に載
られしハ舊き御代の例にて奥津御年の田穀ハ去歲
の秋子成まるものゆゑ歳内子其初穂或ハ皇神子奉ら

るまゝの蔬菜ハ志も是年の初春に生出たとされバ
是と新年に初穂とのやし其羹はくし其又皇神子奉
らせむ此乃 先王報本の感意なり其らし既に稲の
亦一詳に述ぶがごとしるもくあむ其の年立歸り来る
其地胡より小松ひく人もや杉水じ野べにゆくまじ
かきゆ希をくま菜摘と立舞へるさばいハ一ハ乃
歌どもり較くんえく古今集 仁和の帝は其より松は
しましけり時人の菜菜さびあふりて家衣より雪はふ
りけくとそのしむふあく流るへ今もうけし同子在る
がぶと内由の中若菜ハ野原と川邊より其の菜葉集

饗^{ウツク}之^ニ也^カ彼^カ罌^{ウツク}之^ニ菜^ナ摘^{ツク}殘^カ兒^コふ^トふ^ク傳^ハり又^マ川^カ上^リ行^ク
 菜^ナの^ノ流^リ進^ム来^ルし^トも^トん^ク皆^ハ菜^ナは^ハ初^{ハツ}苗^タ菜^ナの^ノ流^リ
 名^ナの^ノぞ^クし^シ若^シは^ハ國^{クニ}語^{コト}子^シ稚^チと^モ弱^{ヨク}と^モ春^{ハル}と^モ訓^ム
 也^{ナリ}と^モ正^タ月^{ツキ}七^{ナナ}日^{ニチ}の^ノ菜^ナ羹^ニと^モ七^{ナナ}種^{シユ}と^モつ^クふ^クは^ハ正^タ月^{ツキ}十^{ジュウ}五^ゴ
 日^{ニチ}七^{ナナ}種^{シユ}此^{コノ}御^{ミツ}食^シら^リ出^デし^ル名^ナふ^ク也^{ナリ}何^{ナニ}の^ノく^ク延^ヒ喜^ビ
 主^{ヌシ}水^{ミヅ}式^{シキ}曰^{ハク}正^タ月^{ツキ}十^{ジュウ}五^ゴ日^{ニチ}供^{ツク}御^{ミツ}七^{ナナ}種^{シユ}粥^{カウ}料^{リョウ}中^{チュウ}宮^{キヤウ}米^メ一^{イツ}斗^ト五^ゴ升^{シヤウ}粟^ム
 黍^ヒ子^シ稗^ヒ子^シ藎^ニ子^シ胡^コ麻^マ子^シ小^コ豆^{トウ}各^{カク}五^ゴ升^{シヤウ}塩^シ四^シ升^{シヤウ}と^モ云^{ハク}く^ク此^{コノ}藎^ニ子^シ
 鈔^{シヤウ}引^{ヒキ}本^{ホン}朝^{テウ}式^{シキ}和^ワ名^ナ美^ミ乃^ノ出^デ處^{トコロ}未^ミ詳^{シヤウ}と^モり^ク今^{イマ}按^{アツ}藎^ニ子^シ爾^ニ雅^ヤ作^{サス}
 皇^{スミマ}本^{ホン}朝^{テウ}式^{シキ}和^ワ名^ナ美^ミ乃^ノ出^デ處^{トコロ}未^ミ詳^{シヤウ}と^モり^ク今^{イマ}按^{アツ}藎^ニ子^シ爾^ニ雅^ヤ作^{サス}
 熟^{ジュク}可^カ以^ヒ作^{サス}飯^{イハ}充^{チウ}飢^キと^モり^ク今^{イマ}按^{アツ}藎^ニ子^シ爾^ニ雅^ヤ作^{サス}
 薯^{シヤウ}蓀^ソ或^{アル}曰^{ハク}白^{ハク}穀^{コク}大^{ダイ}豆^{トウ}小^コ豆^{トウ}粟^ム栗^リ柿^シ藎^ニ子^シ書^{シヤウ}紀^キ天^{テン}武^ブ天^{テン}皇^{スミマ}十^{ジュウ}
 汪^{ワウ}子^シ藎^ニ子^シと^モ大^{ダイ}角^{カク}豆^{トウ}子^シ代^{ダイ}ふ^フと^モり^ク今^{イマ}按^{アツ}藎^ニ子^シ爾^ニ雅^ヤ作^{サス}

年^{ネン}正^{テイ}月^{ツキ}七^{ナナ}日^{ニチ}召^{メカ}親^{シン}王^{オウ}諸^{シヨ}王^{オウ}於^オ内^{ウチ}安^{アン}殿^{テン}使^シ諸^{シヨ}臣^{シン}侍^シ外^{ソト}安^{アン}殿^{テン}置^{ツク}酒^{サケ}
 賜^{タマフ}樂^{ラク}と^モり^ク七^{ナナ}日^{ニチ}の^ノ節^{セツ}會^{ケイ}の^ノ始^{ハジメ}て^テ貞^{テイ}觀^{カン}儀^ギ式^{シキ}の^ノ宣^{セン}命^{メイ}曰^{ハク}
 今日^{ケフ}波^ハ正^{テイ}月^{ツキ}七^{ナナ}日^{ニチ}乃^ノ豐^{トウ}樂^{ラク}聞^ク食^シ須^ス日^{ニチ}尔^ニ在^{アリ}故^{コト}是^{コト}以^ヒ御^{ミツ}酒^{サケ}食^シ閉^ム
 惠^ヱ良^ラ岐^キ常^{ツツ}毛^モ見^ミ留^ル青^{アヲ}岐^キ馬^{ウマ}見^ミ遍^{ヒロ}止^トと^モり^ク今^{イマ}按^{アツ}藎^ニ子^シ爾^ニ雅^ヤ作^{サス}
 事^{コト}ハ^ハ記^キし^テ也^{ナリ}但^{シカ}正^{テイ}月^{ツキ}子^シ日^{ニチ}地^チ若^シ菜^ナ此^{コノ}事^{コト}ハ^ハ本^{ホン}朝^{テウ}文^{ブン}粹^{サイ}
 小^コ臣^{シン}分^{ブン}類^{レイ}舊^{キウ}史^シ次^ジ見^ミ有^{アル}上^{ウヘ}月^{ツキ}子^シ日^{ニチ}賜^{タマフ}菜^ナ羹^ニ之^ノ宴^{エン}臣^{シン}伏^{フツ}惟^ヒ自^ミ觴^{サウ}
 王^{オウ}公^{キヤウ}於^オ正^{テイ}朝^{テウ}至^シ喚^{ウツク}文^{ブン}士^シ於^オ内^{ウチ}宴^{エン}首^{ウタテ}尾^ビ二十^{ニジュウ}餘^ヨ日^{ニチ}洽^カ歡^{カン}言^{ゴン}志^シ者^{シヤ}
 諸^{シヨ}不^フ及^キ婦^フ人^ニ此^{コノ}唯^ヒ文^{ブン}夫^フ而^{シテ}已^マ中^{チュウ}况^{キヤウ}亦^オ野^ノ中^{チュウ}芼^{マウ}菜^ナ世^セ事^ジ推^シ之^ノ蕙^ヱ
 心^{シン}爐^ロ下^カ和^ワ羹^ニ俗^{ソク}人^ニ屬^ス之^ノ蕙^ヱ指^シ宜^イ哉^{ナリ}我^ワ君^{キミ}特^{トク}分^{ブン}斯^ス宴^{エン}獨^{ドク}樂^{ラク}宮^{キヤウ}人^ニ

矣と有り所謂子日七種菜なりて七種と云ふ事ハ八八
寸子日の宴ハ類聚國史 平城天皇大同三年子幼て凡
え 嵯峨 傳和まで有りて又文德實録子天安元年正
月賜曲宴昔者上月之中必有此事時謂之子日燕也今日
之宴修舊迹也延長御記子采女調和若菜羹供進給侍臣
盛中院置中盤云々是と子日の宴めて後くハ寛和元
年 圓融上皇遊紫野折小松立沙上設宴謂之子日遊是
等上月子日の宴とハあれど七日の七種と云ふは此
のやみ師光卿年中行事資隆ハ盛中鈔ふども凡んさ
きはろく不審オハツクキや。大宗家訓篋篋内傳等の書子七種

の若菜七種の粥かどあれと後人の化かせし浪説あり
因て前不言へるがごと七種と云ふ名を七種の御粥と
出まけんといはれり又重明親王記子天曆四年
二月廿九日女御安子朝臣奉若菜と有り此名は若菜
と奉るかと正月七日小限らざるを志るべし然ども類
聚雜要次御七種若菜 十五日粥と次第し御盤七枚青
瓷佐良七口かど載られ又夫木集公初の秋子君り為七
の胡乃七種と云つこと一ん万代り長とあれハ當幼既
みせりみ七種と擲りし也一書に 宇多天皇寛平二年
正月上子日勅内藏寮内膳司獻若菜其後或十二種或七

種をもろくつり今の若菜の御羹ハ水無漸家より献ら
 勢まひく松と芥^カニ加^カら^カ又檀司供御所よりなる七
 種の御漸ハ芥の漸みして芥を少し加^カつ^カなる事と
 人中^ニあり^キ本朝食鑑曰^ク本邦正月七日嘗^シ七種菜粥^ヲ
 以^テ齋^ヲ為^ス一種^ト近世但用^テ齋菜餅子^ヲ作^ル粥^ト按^テ
 今東國の俗賀茂百首慈法寺^ニあり^テぞかし^テあ^リあ^リこ
 ぞ^クせり^ツみ^クそ^クや^クせ^クこれ^ヲもの^トあ^リん^ニあ^リの^ニあ^リ七
 種^トは^ハあ^リぞ^クは^ハよ^クし^クし^クは^ハ西^ニ土^ノの^ニ書^キは^ハ不
 能^ク食^ル粥^ヲ羹^ト之^ヲ以^テ菜^ト可^ク也^トあ^リん^ニえ^キあ^リん^ニあ^リハ^ハあ^リれ^ド皇^ニ
 國^ハ穀^ノ蔬^ノ豊^ク穰^クの中^ニ土^ニあり^テ何^レも^レ異^ニや^ウの^ニ野^ノ州^ニな
 ん^ドかり^クして^レなり^ト入^ルん^ニあ^リん^ニあ^リハ^ハお^レれ^トと^レ已^ルる^ニ

理あり固今一書此説ども^レは^ハ并^ニへ^テし^クた^リ列^スま^シぬ
 ○源氏談善成卿河海鈔^ニ七種^ノ菜^ハ齋^ノ饗^ノ葦^ノ芥^ノ菁^ノ形^ノ酒
 酒代佛之座と云^ク是^レ年^中以^テ事^拾芥^鈔公事根^恒等^ノの^レ説
 並^ニ同^シ枕^ノ州^子に^レ七^日乃^若菜^と人^ノの^六日^乃わ^てあり
 寺^取あ^しか^どす^りに^レ見^もく^くぬ^州飯^子ど^もの^とて^レあ
 る^レ何^とり^そを^と云^とい^つど^とお^しま^しとい^ふべ^いさ^あと
 これ^ヲき^んん^合て^身や^州と^あん^云と^いふ^もの^何ま^は宜
 なる^りり^すぬ^顔なり^ハあ^らま^ふ又^をり^げぬ^る菊
 の^生つ^らび^もて^身ま^はは^めど^様々^な菜^をつ^れか
 くれ^あま^しし^らま^はさ^くも^まじ^けり
 今^據ま^しこ^うは^止月
 六^日に^明日^かむ

七日の菘菜走つ、其の者人と此の時々の小童れ
この何れすそふしぬき菜ごもみぬくと
里茹しぬるほどは少納言戯まて其子等うちハハ
何れ七種むし能く採玉ひとゆふ子どもはハハ
しを存り原地名も得まらぬを依よいらとせざり
中少賢子の不知といひあぐり進これと尼合て吾等
は耳賢子と名を合てあへるがをうし少納言耳無
進げ宜くせ人の向うるまぢ顔あるハと笑ひしりば
又子どもは小賢がつけこゝて菊もハとてさし不
どに清女歌詠しぢくん一説に耳菜叶は即菘菜の一名
佛耳菘耳とゆふ者也又とうしおある菊四葉物語は
と云ふ菊葉は非菘菜葉乃菘葉也とぞ
七くさの御菜あつむふと人日菜羹と和名進バーと
珍れ病患をのかるくと申た者し舊きあこり侍りとり
やうは荆楚歳時記に正月七日、為人日、以七種菜、為羹、食
之、人無萬病とゆふを指していへるもや其説の答曰
正月ハ少陽の月あり又七日ハ少陽地較ありよて
延とらぬ私の家よりくるまで宴會を催し羹と食を

るは病邪氣と 又曰正月十日あまを四日地夜御はし
除くの術あり
所の湯うゆなまら七くさ此御あつものも今日ほでと
ぞ免てひし川湯うゆふて潤じかして其進ばるし
汁沸息あせさせ玉へる此事 豊御食炊屋姫 推古の御
代よりあつる事ふて京外七野とて七所此野あく一くさ
川、流分ちうう勢まふなづかなく菘らに子やうす、
しる佛の産川なく、こちとや中流と河の此川かハ
水芥ふてくくちハ菘の莖あり今按み康富記曰文安
五年正月六日自山城綴喜郡大住献七種菜と云え七
箇此野處に取らるといふ事は李時のかみは見え不

と式子凡えを耳取しとある同しとのを今耳取と
と云ものわを貝原春州の耳菜未知漢名賤婦以為蔬而
食是耳菜此一種小く葉はとまが冬も枯とて春もく
萌モイッ芽ツ起ツ州ツあり○又源氏佐若菜卷河海抄十二種ハ若菜
薊アキ公事キ根ネ源ネ菖イハヒ荇ヒ藜ヒ蕒ヒ菱ヒ芝ヒ蓮ヒ水ヒ蓼ヒ雲ヒ松ヒとあり兼良公
乃説り此松乃字此事 白河天皇の時時師遠小涉尋有
此ハ若松と書てこはと漬也若此事小く傳るると
甲子松とそへくあるさてハいが事ありや上皇仰らま
傳りハ小ハ和名ハ鈔ハ温ハ菘ハ和名ハ小ハ大ハ根ハ是ハあり大根の
今按ハ此ハ十二種皆野生ハ係ハ出ハり管贈大相國上月子日

賜菜羹序野中エラ菘菜ラとありて通證曰七種皆野生之菜
也蓋受る不あるべし 後柏原天皇此大沛歌りくまふ
并ハ花ハよハはハりハてハえハいハづハふハ末ハはハとハしハるハ也ハ此ハ七
くさ食鑑曰今俗正月七日齋粥中入焼餅子而嘗之此擬
七種菜則迎新之意乎按ハ四ハ民ハ月ハ令ハ云ハ立ハ春ハ日ハ食ハ生ハ菜ハ取
迎新之意又歲時記云舊以正且至老日諱食雞故歲首唯
食新菜とあるは西土ハと正月七日ハ七種菜と食と
いふハ荆楚のその俗事ハや遵生八牋云荆土人日採七
種菜作羹湯以食之と云えり自餘ハ菜此各條ハ子ハ識ハ別
いハ里公事根源ハハ延喜十一年正月七日後院ハと七

種シテの茹菜シテと供シテは其菜羹シテと食す此ハ茹病シテなく年中此邪
氣シテと除く術ありと見え一以前シテ右字記等シテ子載す百
ハ醍醐天皇の御時例後正月人日子淨糝シテ或調進せら
引此糝ハ侍所シテ一典シテうる淨糝餅シテ或意シテて来る此ハ餅
ハ熱シテあるとて閑食シテど時シテ和氣丹波シテの典藥寮シテあり是
子若菜シテを加へく獻シテ里シテ云々シテは主上シテ敵感シテ何シテて末代シテまで此
嘉例シテとせられ里シテりる若菜シテと播律シテ必布引シテ漉シテ乃シテ紫シテありシテ貢
る地シテと定シテられ其地シテと茹菜シテ此里シテと呼シテ名シテせり是シテあり芥菘
等シテ或加へく七種シテの菜羹シテとなして庶人シテ子至り服食シテする
亦シテとシテなれ里シテと云シテくシテはらシテび子日シテの茹菜シテと内侍所シテの御

饒備シテとハ別シテく子意シテ調シテある或法シテ淨糝餅シテ子茹菜シテと雜シテへ供シテ淨
とし侍シテるあり淨糝シテとハシテあるシテ子也糝シテと式シテハ七種シテ粥
とあり子シテて糝シテハ粥シテあり或法シテハ糝シテとも雜炊シテともか
ある實シテハ回シテしものあり四季シテ漢シテ子正月十四日シテ松尾シテの神
云々シテ七種シテの羹シテの殘シテあるにシテ今日の淨糝シテと或一シテ子すり
まぜてシテど何シテり糝シテハ和名シテ鈔シテ子鍊シテと何シテの菜シテ菜シテ搔シテ雜シテする
の義シテといつり説文シテ云糝シテ以米シテ和羹シテ也韓詩外傳シテ云孔子困
於陳シテ蔡之間シテ七日不食シテ藜羹シテ不糝シテ禮記注糝シテ米粉也米二肉
一米シテ為主肉シテ為輔シテ合シテ以為餌煎之シテ雜炊シテハ和名シテ鈔シテ子鈕飯シテ加
自伎シテ加天シテと訓シテて雜飯也シテと注シテ於シテ夜慈シテハ御雜シテ饗シテあるべ

しマシアへと約てヤ是雜炊也今の俗正月七日此雜煮
 と調ふものは七種菜と飯小如一味醬汁とて煮調あり
 凡人子南て七歳子あれば男女とも子親戚及比隣七所
 の糍と乞て之を吃しむ其雜煮必正月の祝ひ餅と糍
 煮也凡雜煮ハ舊冬製し餅子牛房蘿蔔昆布薯蕷苳菜海
 氣ふどお糍て糍とし食ふ正月子限らば賓客賀慶の時
 子も亦調へり俚言にゴウモク飯ふどりよハ西土人の
 羅漢菜と稱ふが如し菜品雜糍と望つるも又伊勢ふて
 入飯北陸ふて煮糍あるはミソツふどいひ又上方ふて
 入日の物乃塩糍と福ワカシともいふ是は薯菜の糍也

千々菜チチサイ 芥子カイシ 芥末カイモ 芥子カイシ 芥末カイモ 芥子カイシ 芥末カイモ 芥子カイシ 芥末カイモ

安袁奈アンエンナイ 古事記○即菘菜あり菘菜集ふハ菘菜と訓あり菘菜
 と菘と本同對ふて菘の甘菘根の大小ある一箇を隔
 り故に順鈔に菘薯を安袁奈と誤するといふべり

水草スイソウ 和名鈔水草桶り水草の名舊し本朝食鑑曰洛之
 水草近郊畦間野水以滋養者踊水入菜云々即水草也或
 本士生菜の訛又近江菜天王寺菜下總菜等皆同種ありて是と京
 菜と云ふ高菜タカサイ 新撰字鏡菘と訓あり揚氏方言ハ七名小
 のとぞ高菜タカサイ 知奈と訓あり其所引の揚氏方言ハ七名小
 して一物なるをの安袁奈とし次子菘ハ引蘇敬曰不生
 蕪薯中子收て和名安袁奈とし次子菘ハ引蘇敬曰不生

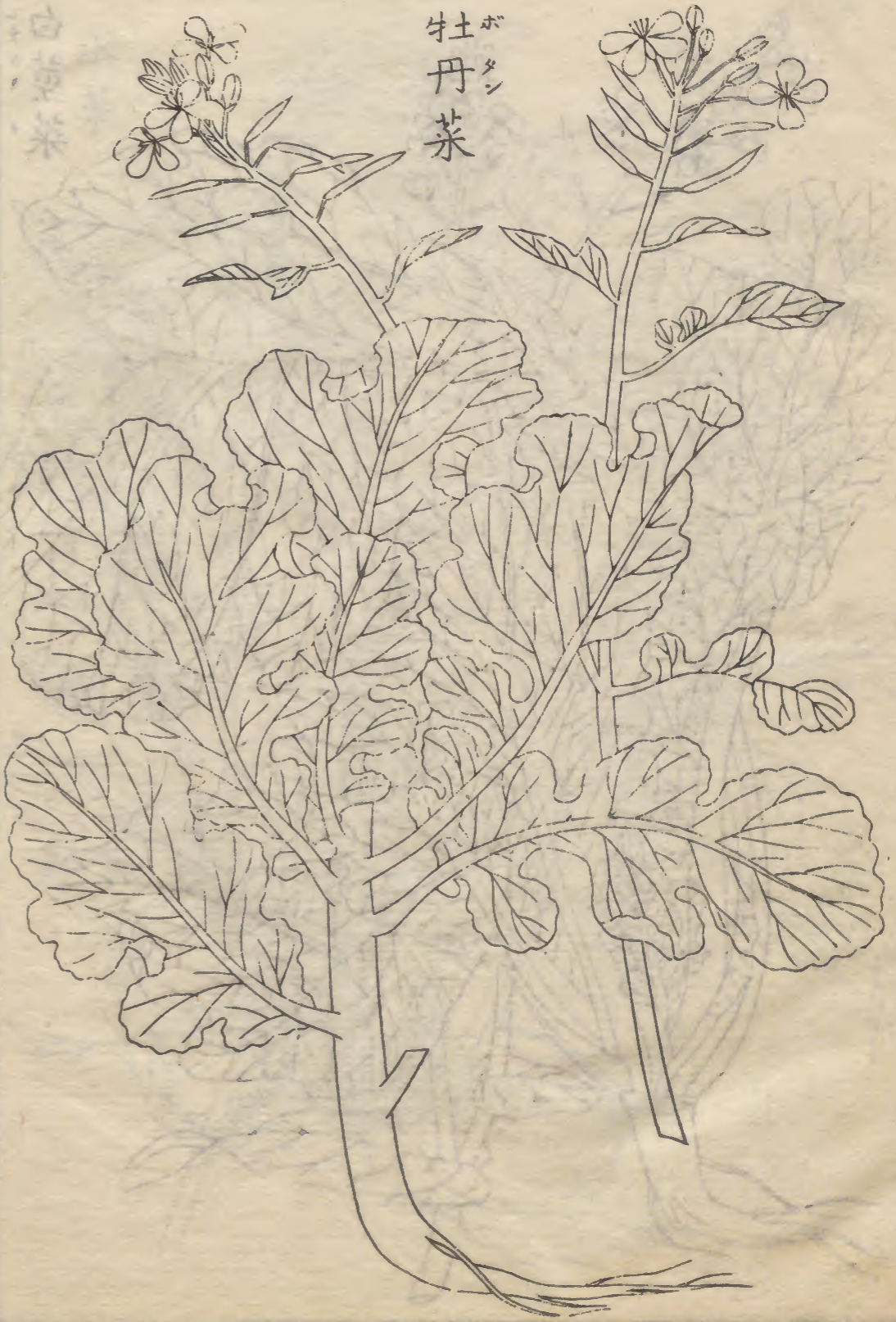


白莖菜 シラクキナ

水菜 ミヅナ



牡丹菜



みて和漢共に少壯此称あり其付事女房といひ青春青
 年あど是也又安麻伎ハ天の氣此おのつら人の命と
 保ちぬる理あり式に甘菜と称一生菜と書し姓氏録に
 ハ青菜葉とありて又万葉の詞にハ新菜夕菜に摘りて
 割茹ふと云らし夏冬ふちかぎらざりて四時生立るハ
 此菘菜ぞゆれど凡ハ只菜とのいハ此と名
 あると云邦みち亦ありり通雅云菘亦菜之總名弘景
 有數種猶是一類止論其さて和名鈔蔓菁を安袁奈と訓
 美與不美菜中最為常食さて和名鈔蔓菁を安袁奈と訓
 るハ今の水菜のたより京師みてハ可美根ありと南土
 に移せば根さへ葉さへ常の青菜と愛れり但鄙小

て京菜キョウサイ了マツルふものハ即ツキ各菜の事コトめて其種カクの変カクぶハあり
江門チカムレ近郊チカムレのはおのハいハらハもハをハれハ異邦イコクニかハくハどハあり
らる蘇菜ソサイハハ況ハに菘菜ソサイ不生ハ北土キツ北土キツ將菘子ソサイ種タネ之ハ一年イチネン即
變ウツル為ニ蕪菁ウツル誤オチ今南北キツ菘種ソサイ之ハされハど津園ツエン菘種ソサイ子タネと物モノ南の
地チへ撒マキるハに一二イチニ冬フユの後ノチハ終ハり根ネなき菘ソサイにおカ及ヒハ人
此ココ知ルる所トコロあり埤雅ヒヤ云ク菘ソサイ性セイ陵レイ冬フユ不ハ凋シユ四シ時ジ長チヤウ見ミ有アル松ソウ之ノ操ソウ
故ユヘ其ノ字ジ會ヘ意イ而シテ舊キウ說セツ菘菜ソサイ北キツ種タネ初ハツ年ネン半ハフ為ニ蕪菁ウツル二ニ年ネン菘種ソサイ都ツ
絶ツク蕪菁ウツル南ナン種タネ亦モ然シ蓋シテ菘ソサイ之ノ不ハ生ハ北土キツ猶モトモト橘柚キツ之ノ變ウツル於ニ淮北キツ矣
是コト也ナリ必ズ乎カてハ天テン五ゴも菘ソサイあると西州シキウハ種タネてハハ北キツの菘ソサイ
と化カの類ルイめて源順ゲンジュンハ近チカムレ菘ソサイ子タネ生ハるハものハをハんハて蕪菁ウツルと安ヤス

表ヒラ奈ナとシてハハ高タカきりハはるハと其ノ他ノハ妙ニして其根ノのなき
が名義ナシハ合アヒぬハかど精シユを致シしハんハ夏ナツ菘ソサイのハ水ミヅと疑ウタガハらハや
いははしハ○凡ソト菘ソサイの種タネと下シ三月サンゲツに苗サダ生ハて二ニ葉エフありハ
と卵割菜カヒと云ク卵カヒと書キ紀キハかハひと例レイハハ芽メと通トウへハ一
況ハハ蛤殼カキのハ并ナヒしハに似ニハバ也ヤ也ヤに甲カウ垢コウの意イ也ヤ又マタ其
二三寸ニニサン延長ニヒタスと云ク菘菜ソサイと云ク菘ソサイの耳ミミ頃ヘリハハ生ハ北キツバ也ヤ凡
ハ菜サイの細ホソ短ミダシあると子菜コサイと稱ナヅケつリ二言集ニゴンシユハ菘ソサイ耳ミミてハ菘
ぬきハハハ子菜コサイハハ日ヒどハなき○前マヘハ
いへる京畿キョウキの菘菜ソサイハ九條東寺クウジョウトウジの近郊チカムレハ菘ソサイと云クと云クとせ
一イチ本ポンハ菘ソサイ十ジュウ莖セイと生ハし味アジ淡タン美ミおハして澤ハふハし春月ハルツキを

又昇西子振ハ菜所の北陸子三月菜と呼ばび関東東めて菹
 菜といふ實ハ同種あり○晚菘所の葉の色深緑子光わ
 子味いととをれより通雅云秋末晚菘今之白菜也牛肚
 菘葉最大又南京京口之菘為上曰箭竿白北京則取入窖
 壅培不見風日長出黃葉嫩黃色脆美無滓謂之黃芽菜和
 名鈔引崔禹錫食經溫菘味辛是人作黃菜常所噉者也黃
 菜俗云玉佐以一云佐波夜介とわり今言拔菜めて多く
 窖養みせり知新謂牛肚菜ハ此ハは度菘菜と云小毒ハ
 可憐所の者甘炒と同會ハ早く除りども○紫菘ハ葉色
 紫あり又牡丹菜或は和蘭菜と云わりの根は地上に抽り

幹立し葉縹色ふりて厚く嫩く白粉と糝しが如し和蘭
 地方の葉色皆忘り又一種和菘菜所の葉細尖り莖子
 近く兩岐わりの之を折せば白汁出りされ菘類子非を
 ○菘菁の類莖を抽出て煮く老ふじすると莖立といふ
 内膳式漬菜子載られぬ俗子小立とも莖立とも稱へり
 和名鈔子豐と訓り字書子豐菘ハ蕪精と云え又豐ハ菘
 と通れどもわり万葉集に上毛埴の穂野のくくち折
 えやし吾ハまゝん志ともし來じとも夫菜の類ハおほ
 く二三月の頃子莖乃ちらて莖花と吐りそが中早晚此種
 各季乃名亦許多あり此花や龍陽の方盛に咲て春の跡



宮重葛

つらと穢が園生も朽ちるはひひりへる胡蝶のむが
 こあどハ莊周が夢にうりれあん心地しそわらへる乃
 何とぞふよくとまれと信へる考はへいとあをれふ
 耳○菜を極るに月くに種下すれむ四節お絶ること好
 し夏ハあろく軍畝の間にあを引或ハ陰溼の地とえ
 らびてよし

氣味甘平ありて毒ありし油となりて頭を塗れば髪を長
 くし○主治小兒赤遊病と治し上下をけり心菘葉を搗
 てけべし即止む又油ハ刀創をひきかき錆を但足の病
 る人ハ食ふと多し○湯盪火傷又失火にて園の焼



倉梯菘

紫菘

櫻島菘





章魚薑

秦野薑

鼠薑



葛畑薑

辛薑

大あり心の糸直又立のぼる地上に根出てとをよ儀ど
糸莖までと常のま踏まりとあるハ儀大根のま浪
らに大湯國分地方に 延喜式營羅腹一段種子三斗と何
塵まると亦志うに 凡う、体の法預その圃と耕は六と涼くその塊と碎
くこと細ふして早きものは六月に境と起て糞壤に和
熟て六月土用後七夕の前はあゝハ八朔の頃下種に
毛子を荏油芥油に浸て灰に雜馬通と乾し綿のぶと碎
きまおし又沙土をほぐへ其上に布覆ときハ猛雨等
苗と敗られど亦油氣よて蠹の害と避べし或ハ浸糸の
煎汁と澆ば虫と殺はと云凡原野瘠土に自生のハ小し
て辛く又赤膏地に挿るものハ辛苦の氣脱び沙壤の熱

田に作るハちくして柔軟漿と食て晚く味甘し唯尾
ハ稍若辛とわす凡長あるに隨て根頭地と抽は淡青
色と上出と噴ふ地中あゝるハ白し又根の上をえは
ると掘入と云○此の諸道儘多し但尾は乃宮重に産
ハ巻大くて味甚絶うり毎歳に京師に輸るに匹馬の
脊僅り二根と駘はとりや土人時と候に長あゝるに割
て織線のおとさ日乾して四方へ鬻り包こは昔より
法州亦此製ありて庭訓往来に織羅菑と云え里語にハ
せろのいんあんどものせり此揚花菜の類あり○山城
の吉田孫津の倉梯武彦乃練馬中野信徳の景山肥後此

菊池あゑ乃吉野伊勢の洞津肥前乃竹師播磨乃津野大
 隅様島ふぐに培嘗と^{ヤシナフ}の都て名産子係是唯地^{コユウキ}道子固
 是稍優劣ありといへど生ハ^{アサカシ}脆熟ハ肥^{コユウキ}なり^{コユウキ}朽月よ
 其夏のは辛く冬ハ甘し存その種類子固まり夏より秋
 にかけて種子を下し冬子根と引^{ヒキ}明^{アキラ}歳春夏の交に莖と^{ヒキ}抽
 で淡紫の花さく^{ウスカラサキ}漢人大根を紫花菘と云ひ花と角と結
 び糞蛆の形あせり子は菘の大あるが如く或ハ^{カド}稜^{カド}あり
 赤水玄珠子と夢ト子と云本州^{ヒキ}○三月大根餅大根わ
 備要にト子と^{ヒキ}乃蓋^{ヒキ}菘トと通用○三月大根餅大根わ
 江陰縣志^{ヒキ}乃楊花^{ヒキ}蘿^{ヒキ}菘ハ蘆菘一種^{ヒキ}こは八九月子種と
 細長味^{ヒキ}鬆脆といふ子の是なるを^{ヒキ}こは八九月子種と
 布三四月此交^{ヒキ}に実を結ぶその小あると江門みて細根

大根と云○夏大根わ^{ヒキ}本州吳瑞云夏月復種者名夏蘿菘この種子ハ信
 濃の景山^{ヒキ}駿河の清水^{ヒキ}より出るものよし故に景山清水
 と通稱とせり^{ヒキ}味^{ヒキ}駿河風土記曰蘿菘入内膳司料と云
 るハ春種^{ヒキ}の夏大根わ^{ヒキ}てわ多て奉貢^{ヒキ}み取^{ヒキ}むひ^{ヒキ}ある
 べし○^{ヒキ}氣^{ヒキ}大根わ^{ヒキ}一名辛大根味^{ヒキ}を^{ヒキ}辣^{ヒキ}し^{ヒキ}麵^{ヒキ}の具^{ヒキ}に宜^{ヒキ}し
 或曰北征録^{ヒキ}乃尾^{ヒキ}張^{ヒキ}り^{ヒキ}出^{ヒキ}るもの四時^{ヒキ}と貫^{ヒキ}して生^{ヒキ}ハ^{ヒキ}辣^{ヒキ}
 謂沙蘿^{ヒキ}菘^{ヒキ}乃^{ヒキ}尾^{ヒキ}張^{ヒキ}り^{ヒキ}出^{ヒキ}るもの四時^{ヒキ}と貫^{ヒキ}して生^{ヒキ}ハ^{ヒキ}辣^{ヒキ}
 く熟ハ甘し^{ヒキ}信濃本^{ヒキ}尾張^{ヒキ}但馬^{ヒキ}相模^{ヒキ}のわ^{ヒキ}り^{ヒキ}よ^{ヒキ}て^{ヒキ}作^{ヒキ}
 あり或曰^{ヒキ}乃^{ヒキ}尾^{ヒキ}張^{ヒキ}り^{ヒキ}出^{ヒキ}るもの四時^{ヒキ}と貫^{ヒキ}して生^{ヒキ}ハ^{ヒキ}辣^{ヒキ}
 一名^{ヒキ}勝^{ヒキ}吹^{ヒキ}大根^{ヒキ}とい^{ヒキ}つ^{ヒキ}る^{ヒキ}形^{ヒキ}急^{ヒキ}身長^{ヒキ}尾^{ヒキ}よ^{ヒキ}て^{ヒキ}氣^{ヒキ}の^{ヒキ}名^{ヒキ}と^{ヒキ}夏^{ヒキ}
 日本^{ヒキ}藩^{ヒキ}日^{ヒキ}向^{ヒキ}の^{ヒキ}城^{ヒキ}郊^{ヒキ}乃^{ヒキ}葛^{ヒキ}原^{ヒキ}大根^{ヒキ}わ^{ヒキ}り^{ヒキ}亦^{ヒキ}氣^{ヒキ}大根^{ヒキ}子^{ヒキ}類^{ヒキ}て^{ヒキ}類^{ヒキ}

の大小三四尾冬月掘採て塩漬シホヅクとん夏ナツも多り肉理キヌ緊シツり
 黄キく香味他タも様サマなり此コノもの薯カ原ハてふ地チも自生シし或ハ
 移ウツリして畚ヒ田タの中に漫バラ撒キゆるも能ナ生シ茂シ且ナ一種イツ原ハ野ノ自
 生シのハ根ネ最ト細ホソて高タカも至タらざ俗ソクも天テン道ダウ大オホ根ネと呼ナづり綱
 目載メ以ヨリ諸シヨ葛カ菜サイ蓋カシられ然シカ○守シ口ク大オホ根ネわを採ツク津ツ管カン神シ祠ジの
 前マに植ウヅしものとそ土ツチ人ヒト宮ミヤ前マ大オホ根ネと呼ナぬ又マタ河カ内チも
 已ナ長ナガ條テみて脆ワカ美ミし糟ヅみ煮ニて四シ方ホウへ致ツケ以ヨリ又マタ一イツ種シユ津ツの池
 田タわす已ナ子コ似ニるものハ潔ケツ白ハクの長ナガ條テぞその土ツチもて水ミヅ柱ハ
 大根オホネといひ京師キョウジもて中ナカ抜ヒキといひ江門カウモンもて自オホ抜ヒキといへ
 已ナ從モト來ト同ドウ種シユあり凡ナニ京師キョウジの地チ根ネの直シ根ネかきハ其コノ地チ石イシ多タ
さ故コトあり是コノ精シユ氣キ土ツチ頭カウも出て其コノ地チ濃ノボし

○秦シ野ノ大根オホネわの秦野シノハ相摸サウモ地チ名ナ本ホン自生シなり此コノもの形
 緊カク細ホソ長條ナガテあり夏ナツ東トウ地方ホウハ特トクに饒ナホくやしあり京師キョウジもて
 長根ナガネ浪ナミ煮ニみて細根ホソネてふもの是也コノといへ已ナ蓋カシむハしハ
 大根オホネと名ナしと此コノ輩ハイもくと東方トウホウもて作ツクるハ硬カタく浪ナミ煮ニの
 ハ饒ナホくう海ウミし生ナマハ辛カラシ苦クて食タふも地チ固カタ今イマ塩シホ漬ヅクとあり
 虎コ澤サハあり出デ以ヨリ長條ナガテの乾ホド大根オホネといへる亦マタこの乾ホドどかし
 北キタ征テイ録ロク云イハ沙サ蘿ラ菔フ根ネ長ナガ二尺ニシツ許コト大オホ者シヤ徑キョウ寸シユ下ゲ支シ生シ小コ者シヤ如ニ筋
 其コノ色イロ黄キ白ハク氣キ味ミ辛カラシ而シテ微オホ苦ク亦マタ似ニ蘿ラ菔フ是コノ似ニて非アラざる如ニ黄キ白
 穂ホ當トウちらむ○紫ムラサキ大根オホネ一名イツ赤アカ大根オホネ莖シ葉エフまで紫ムラサキ色イロと帯オビて
 蓋カシ地チ道ミチあり肉ニクの中ナカも淡タン紫ムラサキ色イロかざり西州セイシュウの俗ソク迨トウ節セツも鱠ウサとし較カマし圖ズ
 集成シユウ引ヒキ歷レキ城シヤウ縣ケン志シ云イハ紅ベニ蘿ラ菔フ形ケイ如ニ瓶ビン然シカ亦マタ有アル白ハク者シヤ紅ベニ者シヤ味ミ辛カラシ
 又マタ農圃ノウボ六書ロクショも紅皮ベニカ蘿ラ菔フと見えし並ナラみ赤アカ大根オホネなるべし
 成形圖說卷之二十一
 二十八

○錦大根一名紅大根亦渦大根ありハ暹羅大根ふどと
 いつり紫ハ菘菜カブに似て紅葉色四時葉エダマキど根と剪キレバうち
 に紅縷文ベニカケカマありて鮮美し伊勢尾流イセウヅにてやしあふ○章魚タコ
 大根あり一株カブより数筋と細根と分出して長尺チビに
 ぶ章魚脚タコに似るあり同カブより本ハ相摸カブあり出しぬ○
 西股大根ハ根カブに齊カブく岐カブあるなり日次紀事曰俗称福來
 十一月子日所供子祭之饌每品加大豆又供西股大根○
 大根の葉乃乾カブると乾カブ葉といふ根とハ冬中簀カブ下カブみ然
 霜カブ凝カブえめしと乾大根釣カブ大根といふカブ
 名とありカブ仙人骨カブとハ忌陸奥南カブ初カブみて凍大根と製カブ正寒
 らしき称目カブからどや

月の漸冷カブみ露天カブて日乾カブせしハ冬類味カブと失カブへり○浅菹カブ
 ハ大根と洗淨水カブと乾カブさしめて塩カブと附カブて桶カブに飛カブじ厚月
 小至りてハ食カブふ味カブへど○貯菹カブハ或カブハ百カブ本カブ後カブとカブ
 和者カブが漢カブ出しぬる冬至カブの前カブ後カブ土大根と搗カブとカブてカブ
 ぎカブ深カブにカブつりカブほしカブ宜カブとカブてカブ塩カブ一斗カブ新カブ菹カブの糖カブとカブ
 三斗カブとカブ入カブてカブ之カブとカブ淹カブ固カブく桶カブと封カブて石カブとカブ壓カブふカブと常カブの
 おとしカブみカブ久カブしく貯カブじと欲カブみカブハ毎月カブの度カブをカブ以カブて塩カブ一斗
 と塩カブべし橋カブものハ色カブ紅カブみ味カブ愈カブ良カブし○寧樂菹カブの法カブあり
 致富全書カブ子糟カブ蘿蔔カブとカブんえカブり其カブ他カブ味カブ蘿蔔カブ漬カブるカブはカブ麦カブ
 子カブ曲カブ物カブふどカブいつりカブ曲カブハカブ婦カブ女カブのカブ詞カブハ味カブ醬カブをカブいカブひカブり

氣味生じてハ辛冷あり食て氣越升せ熱ハ甘温あり食
 へバ氣越降れ○性人血と消し故に常に好く生薑葡萄と
 多食ふ人ハ發熱と白くは血虛ハ人形母く食ふ魚りら
 べの尻所を忘るいへど髪乃斑白なるハ生質も由ガ
 うへ目醫耳聾なるハ吾より先子戒りて一耳とて上
 口利ども下口衰ぬ口惜さとをのしき瘡も皆人まの所
 ころの形氣どかし況や大邦の種ハ四時日周子益所
 是能會澤毒と制し熱さげいつある患人ハ妨ふし○
 主治衄血子落葡萄汁と鼻孔中子滴入て良○齒血去血
 子亦生汁子塩と鹹子行入て嗽く魚し嘔てとよし○急

口痺率子のんど腫生汁と徐くと嘔くして良○卒症
 人身小言徳おら生汁も生薑の絞汁と徐くと嘔くし
 壽域神方子二葉と一挺とて皮子と去て落葡萄三本と切
 片おし水乃煎と一盞とせんじ服し三回おさる
 しと生汁乃○燒酒子碎て解さるも生汁と多く飲べし
 解船子もよし濟急○蕎麥及温純とくらひ毒もあさり
 乃も阿ハ生汁と飲びべし○蜈蚣耳子入たるに生汁と
 丹子抄、げハのりら出○餐饅の咽子噎て遠巡子死
 子とらんとするも生汁と鼻中子灌てよし本朝○煙子
 蒸て此と絞れも生汁と連に咽みと、あバ甕了又落葡萄
 一斤と口中に銜おるときは煙氣人を毒とらふと能く

或ハ新水ホニダイコンの乾蘿蔔カネダイコン以スリ搗タラして飲ノもよし醫林集要又云
 居民逃避石室中賊以煙火薰之欲以迷悶中摸索得一束
 蘿蔔嚼汁下咽而甦レむらし松平相州屋モ百田某モ了レ醫
 あり以武の地ハ冬春必以火災多しとて鷲ハ口ハ子ハ鞋ハ一
 足大根一本以常ハ壁ハに懸レる是大根の汁能ハ煙火の毒
 と防クぐがゆ急ハあり○同赤ハ狂レ躁ハ子蘿蔔の生汁を用て
 黃連ハ甘ハ竹ハ汁ハ各半ハ盞ハ和レ白ハてレ服レ以レ愈シ○暴證ハ誤レて銀粉
 と飲ビ子急ハ生汁飲ビべしハ癆ハ醫ハ○豆腐ハの毒ハ以レ癒レ以
 子湯ハ子煎レて飲ビ○胎癰ハと洗フ方ハ毒ハ頭ハ面ハにレ發レ胎
ハ肥ハ子ハ隨ハ以レ瘰ハと大根ハ乾葉ハ蓮ハ葉ハ車ハ前ハ子ハ各ハ等ハ濁ハ酒ハ以レ能ハ

ぶに煎し洗フべし○湯火傷ハは大根の實ハ黃ハ檠ハ乃ハ粉ハ等ハ
 分ハ研ハ合ハ附ハあり○癆ハの卒ハに何ハありと腫ハ疼ハに大根と擦ル
 しそ汁ハに小豆ハの粉ハと入レ附レべし大根ハ子ハ附ハは大根ハ葉ハ小
 ても研スその汁と附テ佳シ○淋病ハ子大根ハの子ハ切レ末ハし白
 湯ハ以テヒ一づハ用フ○烟ハ竹ハ子ハ哽スるハに生大根ハのハ紐ハ汁ハ
 とハ脈ハぶシ以上ハ和ハ方ハ○瞑眩膏ハ諸ハ淋ハのハ疼ハ痛ハてハ惡ハふハべハつ
 りハ効ハ大ハあハるハ蘿蔔ハと大指ハのハセイハにハ切レ片ハてハよハ子ハ蜜ハ二ハ兩ハに
 浸シしハ半ハ時ハ許ハおハるハてハ取レ出シ候ハ釜ハの上ハにハ置テ漫ハ火ハ以テ炮ス
 可ハ乾シ乾ハばハ又ハ蜜ハとハ浸シしハ又ハ出シ炮ス二ハ兩ハのハ蜜ハ乃ハ盡シに
 あハるハまでハ煮メてハ炮スあハらハりハてハハハおハ返シくハ能ハくハ煮メて



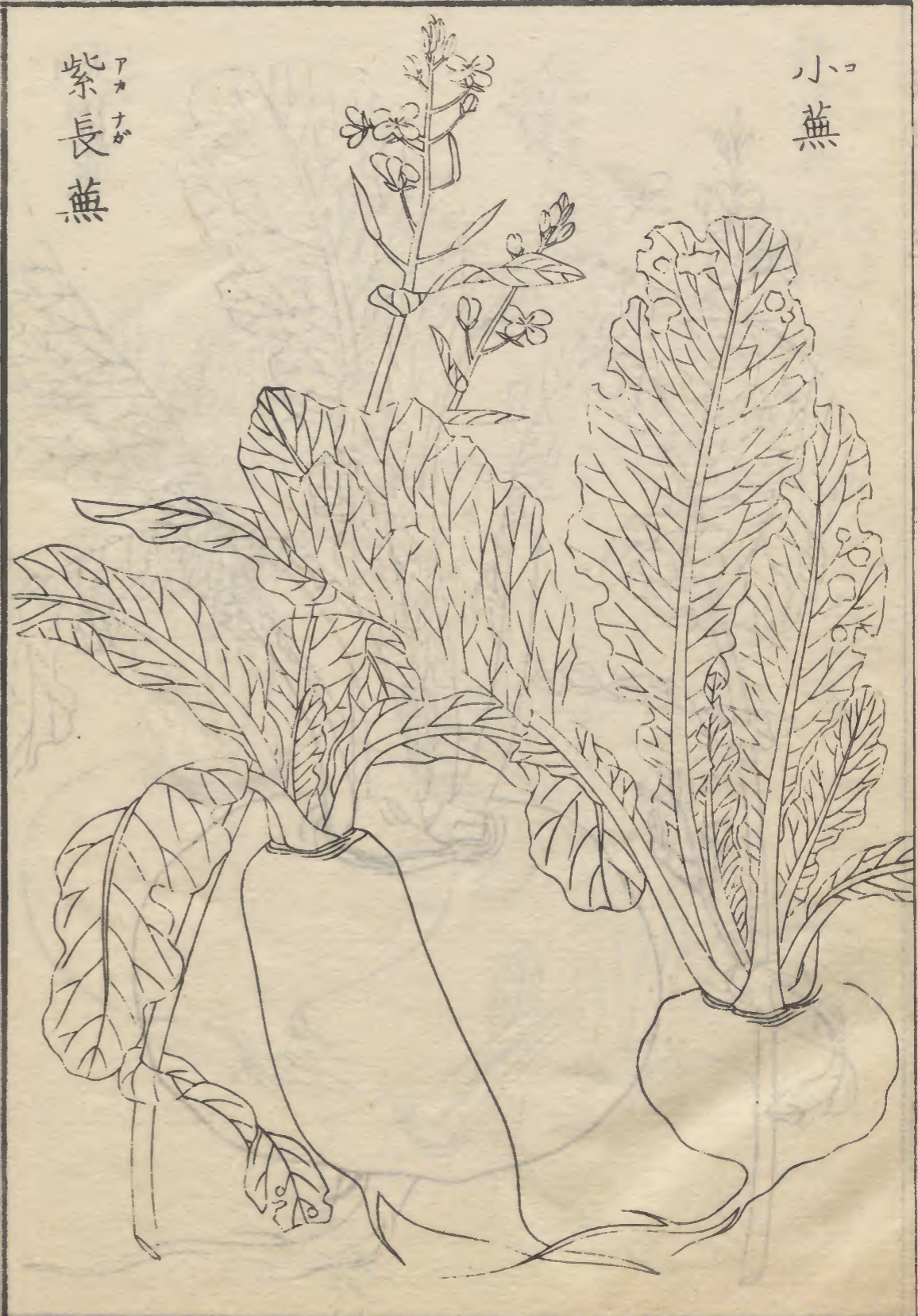
大蕪 オホ

仲川蕪 ナカカハ



難波蕪 ナニハ

小口蕪



紫長蕪

蕪 綱目云蕪薯北人名蔓薯今并汾河朔間人食其
根呼為蕪根猶是蕪薯之號蕪薯南北之通稱也
蕪 今言類聚雜要供御中蕪を用る多ク況えり
蕪 京言ハ加夫良といひて加夫との器々じり

蕪薯 別錄 蔓薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

蕪薯 一名事 物異名 蕪薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

蕪薯 一名事 物異名 蕪薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

蕪薯 一名事 物異名 蕪薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

蕪薯 一名事 物異名 蕪薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

蕪薯 一名事 物異名 蕪薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

蕪薯 一名事 物異名 蕪薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

蕪薯 一名事 物異名 蕪薯 唐水 破地 錐夏 曰夏生 秋曰蔓薯 一種而四名

言ひいへるをハ古事記傳フ鳴鐘カと讀て加夫良とある
ハ蕪カ根カ本カ鑄カ箭カの根カ不カ似カるカたカ不カ名カく俗カ不カ痛カ乃カ蕪カ根カハ
似カるカより名カあしと云ハ非カあカと也カ鳴カ神カ夫カ理カ矢カの神カ乃
三カと畧カき理カ夜カハ良カと切カり是カみカて加カ夫カ良カてカ義カ少
えカ或カ日カ凡カ州カ本カの根カ株カと加カ夫カといカふカ株カの土カの上カに
株カと用カとせカるカの蕪カ根カと加カ夫カといカふカ株カの土カの上カに
の形カ之カに似カるカの蕪カ根カと加カ夫カといカふカ株カの土カの上カに
やどカと又カ似カるカの蕪カ根カと加カ夫カといカふカ株カの土カの上カに
形カ之カに似カるカの蕪カ根カと加カ夫カといカふカ株カの土カの上カに
ハ野カ猪カの頭カふカじカも加カ夫カといカふカ株カの土カの上カに
と云カ其カ他カの頭カふカじカも加カ夫カといカふカ株カの土カの上カに
明年カ春カ分カ子カ生カ夏カのカにカ祀カ矣カとカ蕪カのカ節カ後カ十日カ子カ種カ下カハ
既カ子カ糝カ一カ粒カ子カ代カるカとカ蔬カ中カのカ利カ用カ五カ穀カ子カ亞カるカ也カ故カハ

持統紀シ今シ天下シ勸シ殖シ蕪シ菁シ以シ助シ五シ穀シとシ尺シえシりシ
命シ有シ司シ趣シ民シ收シ斂シ務シ勸シ菜シ多シ積シ聚シ注シ菜シ所シ以シ助シ穀シ之シ不シ足シ
故シ蓋シ之シ為シ備シ詩シ邶シ風シ我シ右シ旨シ蓄シ亦シ以シ禦シ冬シ注シ蓄シ聚シ美シ菜シ内
膳シ式シ營シ蔓シ菁シ一シ段シ種シ子シ八シ合シ總シ單シ功シ三シ十シ一シ人シ半シ畧シ今シ諸シ道
共シ子シ之シをシ種シ出シるシ所シ不シしシ其シのシ種シ類シとシあシどシ多シくシ圓シくシ長シ
くシ大シ小シ亦シひシとシしシかシらシどシ又シ居シ蕪シ子シ持シ蕪シ晚シ手シ蕪シ子シのシ名シ不シ
ありシ完シ美シ其シのシはシ肥シ豊シみシてシ滓シ渣シふシしシ子シ名シくシはシ
近シ江シのシ産シ大シ尺シ回シ圓シくシ去シ白シしシ又シ山シ城シ東シ山シ庭シ川シ雜シ菜シのシ採シ
律シ雜シ波シふシどシもシ相シ同シしシ江シ門シ不シ川シのシはシ年シ毎シ子シ官シ子シ上シるシ
不シどシにシ俗シ子シ貢シ蕪シとシ呼シべシ也シ近シ江シ蕪シ根シとシ同シ乾シしシありシハシ醃シ
藏シとシふシ次シ收シ蓄シてシ四シ方シへシ致シせシりシ式シ乃シ漬シ春シ菜シ料シ子シ蔓シ根シ須シ

須保利六石とて普根須々保利一石とてありと和州葉
 子字鏡と引て道字す所の酢字と、不と引ては須く
 保利ハ漬物の名あるべしと見えたり今迄に浪蕪子
 て蔓菜と採り陰乾やると惣菜乾菜ふといひ示菹と
 るとハ酸莖と称ふは須く莖の轉るみや按よ公事根源
 位ハ菜蕪とありに採らばむらも大根と漬物もよ
 よりの名あるべし採らばむらも大根と漬物もよ
 ばと○子ハ油菜子とおれじく油と酸とばべし○按
 蕪の最大あるものハ伊豆のハ丈島より出るハ丈蕪ふ
 里俗ハ大蕪とも云ハ丈島にてハこの蕪と刺穿て釜乃
 ぶとくし飯と炊き蕪を煮るとありと親見しこの話

里是明一統志徳安府子謂根子菜根似蔓菁而大又似蘿蔔
 他處皆無惟安陸為之といふの輩からじ本藩大隅の中
 仲津川ハ考る者ハ蕪をあり是食療本州の九英菘子元
 至し又根圓く稍扁く截て金暈あると俗ハ天王寺蕪と
 稱ふ本津今宮等の地みせるもの大小二種あり乾て蔬
 じせる者白ふて風味甚とをれ正字通ハ蓮花白と云
 えり又根の圓て長と長蕪と云信濃等ハありと云ハ
 正字通ハ箭筈白と云ものぞ王整姑蕪志云蕪菜出群城
 肥白而長名箭筈菜冬月醃藏以備藏故名是亦此間の長
 蕪みして江戸の蕪菜菹とこの属あり又一統志陝西

圓根似蘿菈而圓青色と云ハ蔓菁あると漢國の蕪ハ根
凡て長きれりかくいつり但救荒本草の野蔓菁と農政
全書の水蔓菁山蔓菁ハ未だ考得じ
根葉氣味甘苦温無毒蘿菈ありハ甜く苦し○燒酎に醉
て死せんとすハ蔓菁乃生汁と取口子沃ぐ煎し又大醉
宿醒み多く一ど病困との蔓菁に米少許と入煮て滓と去
此と飲えめて良東醫寶鑑○無名腫毒に蔓菁根と搗て
塩少許と入和勻て封べし○犬咬傷愈て後復瘡癢るも
のに蔓菁の根汁と搗て良○蕪根の中は穿白礬と納寒
水子曝乾し時子煎じ之を礬と出取ぐ眼病と治る俗俗

蔓と蕪明礬といへり傳て尤驗わりこの花と子ハ眼療
子用るべし本草子載といへども蕪明礬の法ハ不え
ど○子氣味苦温無毒も眼疾と治し又明少水に煎し
頻に搗しておし又花と乾し用ひてもおし○黄汁いで
衣を深湯唾までお皆黄色みふるに子未となし平旦
子并華水にて日く搗ておし色黄みハ人卒尔渾身黄み
子と搗て汁と取りおし和て飲えむべし○諸葛菜ハ本
艸既子蕪菁の一名とふせり高峻事物紀原云今所在有
菜野生類蔓菁葉厚多岐差小子如蘿菈復不光澤花四出
而色紫人謂之諸葛菜又朱輔山溪蠻叢話云猫獠徭獠地

方產馬王菜味澀多刺即諸葛菜也今按子諸葛菜ハ綱目
引嘉話錄云諸葛亮所止令兵士獨種蔓菁者取其纒出甲
可生啖一也葉舒可煮食二也久居則隨以滋長三也棄不
令惜四也回則易尋而採五也冬有根可食六也比諸蔬其
利甚博至今蜀人呼為諸葛菜江陵亦然又宋の范祖禹が
唐鑑云唐德宗建中中朱泚叛攻圍奉天城中資糧俱尽每
俟賊休息繼人於城外采蕪菁根而進之德宗帝召卿相將
史謂朕以不德自陷危亡公輩無罪宜早降以救室家羣臣
皆頓首流涕期盡死力故將士雖困急而銳氣不衰此この
菜根亦人命を活けし是も是も然るも師を他かふ出しそ

在陣の間に競とちんめは菘菜は第一と云四時に拘ら
ば蒞巴即生て絶ど採食ふべし夫治乱ととに衣食住の
三者尤急みして古の主將必ば粟帛塩豉の末といへど
も皆自知て其辨用哉做主と云るも左平の目ハ家政
と有司ののと妻て表裏の若お内おの支配何と云ハ
菘菜辨へざる時ハ終ハ有司主財と照管て廩庫虚耗に
至り亦措所をさるざるも有りその經生或人の書と請
し兵と論とるもそ奉つくふと省ざればこの失と免
せざればと云る也 臣國柱 嘗て加藤清正朝鮮在陣の日
そ留書官か為下川五人へ玉中の法令出征の餼餉を下

知せし手書と云ふに至^タ最^ニ切^クりて至^モ能^ク書^ヒあり予^ハ中^ノ葉^ト
 種^タ子^トと取^リ集^メぬ五斗あり其^ノ一^斗ありとも急^ニ可^ク書^キ越^スと
 の事あり次^ニ其^ノ前^ノ後^ノの文^ヲまでと写^シし載^メぬ其^ノ文^ハ曰^ク態^ハ
 園^ノ兵^次善^造の仍^テ考^後大^友右^衛上^正出^果の付^テ子^息場
 法師^事某^ノ一^下は成^法預^ハ就^吏彼^家来^之者^妻子^之義^領
 内^ノ可^有者^ハ此^ノ以下^ノ数^條ハ大^友家^ノ預^リ人^を肥^後公
 收^一兵^糧之^儀千^石考^万石^子ありと^ハ伊^賀船^ノ白^石可^有
 越^たら^ば此^方子^不入^とも公^錢の法^毎用^ニ立^可以^皆不
 苦^ハ兵^糧運^ハ一^バ及^速惑^ハ每^大豆^と二^斗石^三千^石可
 為^越の事^一味^噌斗^二斗^入の桶^二百^と三^百と^こし^ら

一家^ヲ其^ノ内^又も^諸本^高漸^ハ所^所茂^町中^とも^改味^噌
 有^次弟^ヲ其^越出^味噌^のか^らり^ハ大^豆と^相渡^ハい
 う^不ど^越出^ても^換子^ハあ^らば^一場^の儀^ハ一^斗
 いと^二斗^とい^ハ入^事の^皆得^テ可^ク書^越の^事一^斗
 量^三十^帖不^ど其^越出^ハ一^茶の^湯の^ふり^ハ彼^越子^ト
 有^之の^書紳^ハ一^書又^名作^具是^名護^屋へ^去年^{より}来^ル
 甲^有之^由の^又登^んた^うも^中の^何と^不書^渡ハ^哉
 いつ^の用^子可^立と^存延^引ハ^哉さ^の限^子て^ハ只^んか
 くの^儀ハ^至前^書外^ノ中^書の^皆定^ム可^ク為^ル分^ハ一^去年
 等^いつ^のも^のど^とく^百姓^前不^知ハ^哉船^の者^其等^ヲ請^取

老山後砲之儀出來次第此方へ一若城玉葉之軍子出來
次第急一若城之事一砲砲をかし必者もても薩摩の方
の者成共お百千人こあらむお拘て若城つゝの者公人
お子二子こあらむ成以事お拘可若城之事一以扱之後
也お事以て涉陣之長引解之者虎然一若城用意て在
之山事一城然然之也若一若事不自由山故ららひ山
中お守山いりやうお不自由山之扱之丈まこて中付山
おへ不自由山故ららひ然之也若一扱之山へてあ人て
為曲言いり一大互お取之者不こて若付小屋掛けと
仕度也中いり、本行ともさらせ小屋掛け心お仕山扱

こ中付山事一後後の鞆も是下山舟片時ゆ急可若
後山事一官前も中付舟也何程も其山以然らせ
て中付山此山舟少みじらく山皆おがてと也山也
うこて中付山一のり具是等のりさし山、のり
さお十存成共百存成共一若城之事一以表へ書信こ
人と若城いり重てハる備者若城のり仕一月こ
二度づ、とだえお若城の扱之可お定城お用所等
お中か用也お俄之急用以下それくと番おのと仕て
若城則此返事之番おりの姓一若城月とて若城治之
山、可為曲事山扱之山こし山へバいぶお百を

貫子て唐南蛮までも多し山の後といふ事信不
之解沙治も浪りも一らのそくもちやうちんら
くと一夜もみ丁程どがしゆ程のと千丁計で
も二斗入と二三斗増て其城の志もよくどい
存、有次第此方へ可成跡といふ京都へ中を十
ももこしらへて自然係と成成と成成作事も
之の皆不事取扱と兼てこしらへて其の上
糸と通片時も其急お網で城當陣存も其
こちがひ當年ハ其許も其事て不自中
いしる此方不中其の城の志もよくどい
こちがひ當年ハ其許も其事て不自中

分中不て有他町の月母の自法正加
とのへ下川又た東向とのへ日付と
入書尚以候子河兵次中其の志もよくどい
物積の志もよくどい
しげを志もよくどい
ていそぎ可差候此方
地、有るりぢみ人大工
目成其十其自成其お酒
づとといつらたせ
ういせそ方をわめさ
成

一め形仕の一人こし中べくいいつまを徳蔵人
差越のハ道具以下丈夫持来のやうに三月付此方
君の蔵人を及くいてやくこくごいゆるし二三
月間おどお網のふく差越此方よりうるし一丸おし
くやくもたくごいふふるしとこし中べくい以上の
件く肥後公ハ昨今新附新参の臣庶多ればかくも有り
しみや因て採り取我慨言征韓の事を論ひし中に大岡
乃侍心はつひり明の國を服従せんと思はしりし
小西の長子おわくハ去々ぬ境は年月と重ねてくるし
軍に劣るぬ進ばふ意しくていふでとく得るむやと

思ふ心深きにそくてあるまじきわあちは引出しけ
るさうと姑の御を當める心のきゆまげりしけ加
主計政清正ぬしおてひるぶるに明の國海で亦平ら
ごハゆきじと深く思ひ決て々のまぎらハしりり
乃名が和睦のそごとも更に議あはる大くの皇國の
あめあもいとく忠誠あましは此ぬしにあんるるか
かどりれバ乃長かどかたへの人こみハそのと憎まれ
て不和ぶししとごも胡解明乃人其を此人とば討みい
エド子物みおとひて平壤録もも清正才能勝行長數倍
かどぞいつりりるとあり
凡大岡胡解を征て明と
伐かんと謀るむいしあり

成
形圖說卷之二十一終

其間彼と此とのわしらひよふしり
 戎概言の儀痛いと正しくて洋なれは
 六ろわりの文と後以て必加藤清正
 絶色置陣後人皆以て必加藤清正
 物既亡朝鮮又移禍我國耶遂殺之
 頗忍亦一快事或曰此女乃朝鮮王
 之清正曰此亡國之妖猶欲得之乎
 明人震駭去未之孰為真說又曰夫
 厲之暴而射其至亡國者西施之力
 宋太宗射殺太祖美人於花下其事
 機所緣寔不得已也至仁宗聽諫即
 君克己復禮之德其痛號仁誠無愧
 祥の美一人殺を惨刺子似りとい
 小己と正し人殺を正況や錢子
 と願下子勇あ夫大臣は君の非を
 清正の勇一初に冠と吾邦子稼を
 へど其人子初に冠と吾邦子稼を

